

聴覚障害生徒による濁点表記の誤り

田中 優子

筆者は2022年に本校高等部普通科生徒55人を対象に漢字の読み方調査を行い、その結果を報告した(田中2023)。今回はその継続調査として2024年に行った本校高等部普通科生徒70人を対象とした調査からいくつかの語を取り上げ、聴覚障害生徒に特徴的な漢字の読み誤りについて報告・考察する。具体的には「人数」の読み方を「にんすう」、「長靴」を「ながくつ」などと濁点を付けずに表記したり、「不足」の読み方を「ぶそく」、「心地」の読み方を「こごち」などと、誤って濁点を付けて表記するケースを取り上げた。原因として連濁のルール認識不足と発音が正しくできていても表記が一致しないということが考えられるが、後者については今後の検証が必要である。

キー・ワード：連濁 濁点 読み誤り

1 研究の目的と先行研究

茂木他(2015)では聴覚障害児は健聴児に比べて音韻的な誤りが多く、特に濁点や特殊音の誤りが多いとしている。それは筆者が本校の高等部普通科で国語を教えていても実感できることであった。そこで筆者は2022年に本校高等部普通科生徒55人を対象に、音韻変化・交替(連濁・母音交替・連声・半濁音化)のある語の漢字の読み方についての調査・研究を行った(田中2023)。その際、日常的に使用する機会が少ない語の方が読み誤りが多いが、日常的に使用される平易な語でも一定数の生徒が誤って読むことが確認された。また、音韻変化・交替のある語との関連で調査した、音韻変化・交替が想定されない語のうち、「不足」と「心地」に誤って濁点を付けて読むケースが一定数見られた。本来付かないはずの濁点を付けて読む現象に関しては茂木他(2012)でも報告している。小学部難聴児童の調査では全学年で「不思議」を「ふじき」、「自転車」を「じでんしゃ」と書くような誤りが見られたと報告しており、音声学的な無声と有声の対応を持つ子音は調音点や調音方法などの特徴が同一で口形での見分けが難しく、聴覚障害児にとって学習が困難であるとしている。また、茂木(2023)では、聴覚障害児は一貫性の低い漢字(漢字の読みの種類が多いもの)の習得に困難があるとされている。林他(2017)では、聴覚障害

児による漢字の読み誤りは語彙力の問題もあるとしている。

今回は2022年の調査に引き続き行った2024年の調査から、日常的に使用される平易な語の読み誤りと、本来濁点が付かないはずの語に濁点が付く読み誤りに注目して、その要因を探っていききたい。

2 調査

2024年9～10月に本校高等部普通科の生徒1～3年生70人を対象に国語の授業で漢字の読み方の調査を行った。事前に調査について説明した後、調査用紙を配布し、漢字の読み方のテストという形で行った。解答はテスト終了後に生徒に配布し、結果をまとめた後、正答率や誤答の傾向について生徒にフィードバックした。問題は全部で66問で、1問1点とし、満点が66点である。実際の調査用紙には「長靴をはく。」のような形で各項目の下線部の読み方を書く欄の後に、各語が表しているものや状況が大体イメージできるかどうか、○を付ける欄を設けた。これはその語の意味・用法を知っているかどうか確認するためである。また、漢字の読み方の問題とは別に、最後の問いとして、それぞれの語の音を発音したらどうなるかイメージしたかどうかを尋ねた。この問いは普段から音韻を意識しているかどうか確認するためのものである。

18 聴覚障害生徒による濁点表記の誤り

3 結果

生徒 70 人全員の解答を集計し、各項目で 70 人中何人が正答したかを正答率として計算した。なお、音韻を意識する生徒は 53 人、意識しない生徒は 17 人で、それぞれの平均点は 66 点中 53.7 点と 40.9 点であった。参考までに本校小学部 6 年生 6 名（発音指導を受けている）が同じテストをやってみた平均点が 49.8 点であった。音韻を意識しない生徒は音の違いを重視していないわけなので点数が低いことは最初から予想された。しかし、音韻を意識している生徒でも読み誤りが多い語がある。本稿では、主に音韻を意識している生徒が誤った読み方をす

原因について考えていきたい。

次の 8 問の下線部の読みについての結果を扱う。

- ①靴下をはく。
- ②長靴をはく。
- ③制服に合う革靴。
- ④人数が知りたい。
- ⑤水が不足する。
- ⑥材料不足だ。
- ⑦心地よい風。
- ⑧夢見心地で過ごす。

これらのうち、⑧「夢見心地」はその語の意味・用法を知らないと答えた生徒が 8 人で、そのうち 7 人は誤答であった。それ以外の語は全員が意味・用法を知っていると答えていた。

Table 1 各語の正答数と正答率

語	全体 (70人)		音韻への意識	
	する(53人)	しない(17人)	する(53人)	しない(17人)
靴下	70 (100%)	17 (100%)	53 (100%)	17 (100%)
長靴	56 (80%)	14 (20%)	45 (85%)	11 (65%)
革靴	60 (86%)	10 (14%)	48 (91%)	12 (71%)
人数	52 (74%)	18 (26%)	46 (87%)	6 (35%)
不足	51 (73%)	19 (27%)	37 (70%)	14 (82%)
材料不足	58 (83%)	12 (17%)	49 (92%)	9 (53%)
心地	50 (71%)	20 (29%)	41 (77%)	9 (53%)
夢見心地	30 (43%)	40 (57%)	26 (49%)	4 (24%)

Table 1 に①～⑧の語の正答数と正答率をまとめた。() 内は正答率をパーセンテージ（小数点以下四捨五入）で表したものである。本調査では、デー

タの母数が 100 にも満たず、また、音韻を意識しない生徒の数は 17 人と少なく、パーセンテージを考察の根拠とすることは適切ではないと考えるが、母数が異なる集団の解答状況を比較する上での補助的な意味で添えるものである。

(1) 濁点を付けない読み誤り

後部要素が連濁する語から、「長靴」「革靴」と「人数」を取り上げる。これらはどれも平易な日常語であり、その語を知らないから読めないという可能性は少ない語である。なお、「人数」は漢語で、鼻音の後が濁る例である。

「靴下」は正答率 100%だったので、「靴」という漢字が読めることは確認できる。音韻を意識する生徒の正答率が「長靴」は 85%、「革靴」は 91%であり、読み誤りの内容はそれぞれ次のようであった。数字は誤答数である。

「長靴」：ながくつ 7, ながぐち 1

「革靴」：かわくつ 3, かくつ 1, かわらぐつ 1

次に、「人数」は音韻を意識する生徒の正答率が 87%で読み誤りの内容は次のとおりであった。

「人数」：にんすう 6, じんすう 1

音韻を意識する生徒であっても、一定数の生徒が濁点を付けずにこれらの語を読んでいる。これは 2022 年の調査の結果とも一致する。このときは「長靴」の方が「革靴」よりも正答率が高かったが、被調査者の人数や構成が異なることを考えると誤差の範囲である。また、「長靴」を「ながぐち」と読んだ生徒は「革靴」は「かわぐつ」と正しく読んでいた。

(2) 誤って濁点を付ける読み誤り

「材料不足」と「夢見心地」は後部要素が連濁して「ざいりょうぶそく」「ゆめみごち」と読むが、「不足」と「心地」はどちらも単独では濁らない。以下、Table 2～Table 7 でそれぞれの語と 2022 年の調査時の「不足」と「心地」の集計結果をまとめて示す。正しい読み方は太字で示した。パーセンテージは、全体 70 人、音韻を意識する生徒 53 人、意識しない生徒 17 人それぞれにおける割合である。

各表の二重線より下は濁点が付くか否か以外の要因による読み誤りと判断されたものである。

注：表中のパーセンテージは、小数点第1位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100%とはならないことがある。

Table 2 「材料不足」の解答結果

解答	全体 (70人)		音韻への意識	
	する(53人)	しない(17人)	する(53人)	しない(17人)
ざいりょうぶそく	58 (83%)	9 (53%)	49 (92%)	9 (53%)
ざいりょうふそく	7 (10%)	6 (35%)	1 (2%)	6 (35%)
ざいりょうぶぞく	1 (1%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)
ざいりょうふぞく	3 (4%)	2 (12%)	1 (2%)	2 (12%)
ざいりょう	1 (1%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)

Table 3 「不足」の解答結果

解答	全体 (70人)		音韻への意識	
	する(53人)	しない(17人)	する(53人)	しない(17人)
ふそく	51 (73%)	14 (82%)	37 (70%)	14 (82%)
ぶそく	15 (21%)	1 (6%)	14 (26%)	1 (6%)
ふぞく	4 (6%)	2 (12%)	2 (4%)	2 (12%)

Table 4 「不足」の解答結果(2022年)

解答	全体(55人)	
ふそく	41 (75%)	
ぶそく	12 (22%)	
ふぞく	1 (2%)	
そぞく	1 (2%)	

Table 5 「夢見心地」の解答結果

解答	全体 (70人)		音韻への意識	
	する(53人)	しない(17人)	する(53人)	しない(17人)
ゆめみごち	31 (44%)	5 (29%)	26 (49%)	5 (29%)
ゆめみこち	11 (16%)	4 (24%)	7 (13%)	4 (24%)
ゆめみごち	15 (21%)	2 (12%)	13 (25%)	2 (12%)
ゆめみこち	2 (3%)	1 (6%)	1 (2%)	1 (6%)
ゆめみこころち	2 (3%)	2 (12%)	0 (0%)	2 (12%)
ゆめこち	2 (3%)	0 (0%)	2 (4%)	0 (0%)
ゆめみこころち	1 (1%)	1 (6%)	0 (0%)	1 (6%)
ゆめみごころち	1 (1%)	1 (6%)	0 (0%)	1 (6%)
ゆめみごころ	1 (1%)	1 (6%)	0 (0%)	1 (6%)
ゆめみしんち	1 (1%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)
むけんごち	1 (1%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)
むみごち	1 (1%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)
むみしんち	1 (1%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)

Table 6 「心地」の解答結果

解答	全体 (70人)		音韻への意識	
	する(53人)	しない(17人)	する(53人)	しない(17人)
こち	50 (71%)	9 (53%)	41 (77%)	9 (53%)
こち	9 (13%)	1 (6%)	8 (15%)	1 (6%)
ごち	1 (1%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)
こち	1 (1%)	1 (6%)	0 (0%)	1 (6%)
こころち	5 (7%)	3 (18%)	2 (4%)	3 (18%)
こころち	1 (1%)	1 (6%)	0 (0%)	1 (6%)
ごころち	1 (1%)	1 (6%)	0 (0%)	1 (6%)
しんち	1 (1%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)
こころ	1 (1%)	1 (6%)	0 (0%)	1 (6%)

Table 7 「心地」の解答結果(2022年)

解答	全体(55人)
こち	41 (75%)
ごち	8 (15%)
ごち	1 (2%)
こち	1 (2%)
こころち	3 (5%)
しんじ	1 (2%)

「不足」も「心地」も本来単独では濁らず、「材料不足」や「夢見心地」のように前部要素が付いた場合に連濁現象が起きて後部要素が「ぶそく」「ごち」と濁るものである。

「材料不足」については、読み誤りの中では後部要素を連濁させずに「ざいりょうふそく」と読むものが最も多かった。また、その誤りは主に音韻を意識しない生徒のものであった。本来濁らないはずの音が濁る読み誤りとしては「ざいりょうぶぞく」と後部要素の1文字目だけでなく2文字目も濁る誤りと、後部要素の2文字目のみが濁る「ざいりょうふぞく」が見られた。

「不足」は「材料不足」よりも読み誤りが多く、特に「ぶそく」という読み誤りが主に音韻を意識する生徒に目立って多い。2022年の調査でも「ぶそく」が最も多かった。

「夢見心地」については「ゆめみこち」と後部要素を連濁させずに読む誤りも一定数見られるが、「ゆめみごち」と、後部要素の2文字目が濁る誤りが最も多く、「ゆめみこち」と後部要素の3文字目が濁る誤りも見られた。

20 聴覚障害生徒による濁点表記の誤り

「心地」は「ごち」と2文字目が濁る誤りが最も多く、特に音韻を意識する生徒に多い。「ごち」「ごち」と、濁点の位置が1文字目、3文字目の誤りも見られた。「ごち」という読み誤りが多いのは2022年の調査でも同じであった。

なお、「心地」「夢見心地」は「不足」「材料不足」よりも連濁以外の要因による読み誤りの数と種類が多い。

4 考察

(1) 濁点を付けない読み誤り

「靴下」は読めるが、「長靴」「革靴」は読めないケースがある。どれも平易な日常語であることから、高校生が語彙として理解できないという可能性は低い。しかしながら、「長靴」を「ながぐち」、「革靴」を「かくつ」「かわらぐつ」など、語として意味をなさない読み方をしている生徒がわずかながら存在することには注意が必要である。「革靴」については「革」という漢字が読めなかった可能性もあるが、「靴下」が読める以上は「靴」という漢字は正しく認識できているはずで、「かくつ」や「かわらぐつ」という語はないという判断ができないことが語彙力の不足を示している。「人数」を「じんすう」と読むのも同様である。語彙力の不足については、個人差があることから、個別の対応が必要と考えられるが、それ以外にも、「ながぐつ」「かわくつ」「にんすう」などと、連濁させずに表記する生徒が、音韻を意識している生徒にも一定数見られるのはなぜなのか。そして、高校生になるまでその誤りが正されずにいたのはなぜなのか。

考えられることは2つある。1つ目は発音において音韻を意識していても、それが表記に反映されないということである。話すときはそれで通じていても、表記において濁点を付けるか付けないかに生徒の意識が十分でないことが考えられる。2つ目は連濁のルールが十分に理解されていないということである。また、発話において濁点が付いていなくても周囲から注意されずに見過ごされてしまうことも環境要因としては考えられる。医療技術の進歩で

人工内耳を装用する生徒も増え、手話を使わなくても音声のみで発話が十分聞き取れる生徒も年々増えている。特に注意しなくても会話が成り立つため、会話においては1つ1つの語の発音を特に確認することもなく、「なんとなく」相手に伝わり、濁点が付いていないことに気付かれない可能性がある。

(2) 誤って濁点を付ける読み誤り

「材料不足」と「夢見心地」は後部要素が濁らない読み誤りがそれぞれ70人中7人、11人と一定数見られるが、それ以外に付くべきではないところに濁点が付くケースがあることに注目したい。「夢見心地」が「材料不足」よりも正答率が極端に低いのは、1つには語彙として知らない生徒が多かったことによると推測される。それは「ゆめみこころち」「むけんごち」など、語の意味がわかっているとは思えない誤りがあることからわかる。実際に「夢見心地」は語の意味・用法がわからないと答えた生徒が10人いたが、「材料不足」はわからないと答えた生徒はいなかった。また、「心地」は「不足」に比べて一貫性が低い、つまり読み方が複数考えられることも読み誤りの種類を増やしていると考えられる。連濁した場合は後部要素の1文字目が濁るが、「ざいりょうふぞく」や「ゆめみごち」など、後部要素の2文字目以降が濁る誤りが見られることから、2語が複合した場合に後部要素の音が濁るというルールへの意識はあるが、それがどの音かまでははっきりわかっていないか、あるいは連濁のルールへの意識が薄いことが考えられる。

そして「不足」「心地」は他の語と複合しておらず、連濁が起こる条件に当てはまらない語であるが、「材料不足」や「夢見心地」と同様に濁って読む誤りが見られる。特に「不足」は、音韻を意識する生徒に「ぶそく」という読み誤りが多い。これは「不足」は「心地」よりも日常的に「材料不足」の他にも「勉強不足」「練習不足」「睡眠不足」など、連濁する複合語で使われることが多く、その影響で濁る読み方が定着してしまったことが考えられる。茂木他(2015)でも、聴覚障害児は特定の漢字の読み

方を1つ学習すると、その読み方に固執してしまい、他の読み方が困難になるという先行研究に触れている。「不足」は語彙としては平易で、日常的にも多用される語であることから、語彙としては理解されているはずである。濁点の付く位置の誤りも、「ぶそく」以外は「ふぞく」が1人のみであったことから、複合語の連濁の影響が大きいと推測される。

一方、「心地」は語彙として「不足」に比べると日常的に使われる頻度が少ないと考えられる。「居心地がいい」などという表現にしても、高校生が日常的に使用するとは考えにくい。使用語彙としては「心地」ではなく「気持ち」が使われることが多いのではないかと推測される。少なくとも、「～不足」に比べると「～心地」は使用頻度は少ないと考えられる。そのため、「不足」と同様に「夢見心地」や「居心地」などの語を知っている場合はある程度「～心地」という複合語の連濁の影響は受けるが、その語をよく知らない場合は濁点の付く位置にばらつきが出たのではないかと推測される。なお、「夢見心地」と「心地」はそれぞれ最も多い誤答が「ゆめみごち」と「ごち」で、いずれも「ごち」の2文字目に濁点が付く。使用頻度が少ないために複合語で正しい読み方が定着せず、連濁のルールへの認識も不足していたために、濁点の位置を誤った可能性がある。

また、4の(1)「濁点を付けない読み誤り」と同様に、発話において濁点を付けていても、表記において濁点をあまり意識しない生徒がいる可能性や、周囲に気付かれないために注意されずに見過ごされてきた可能性もある。

5 まとめと今後の展望

濁点を付けるべき語に付けない誤りも、濁点が必要なのに付いたり、違う場所に付いたりする誤りも、高校生になっても修正されていないことが問題である。「人数」や「長靴」「革靴」「不足」などの日常的によく使われる平易な語にそれが見られることは重く受け止めたい。平易な語であっても、全ての教科において、言葉の正しい読み方には注意して、生徒の発音を確認し、その表記に

注意をさせることを日頃から学校として意識して行うことが望ましい。

なお、考察したことの検証として、漢字の読み方を書くときに濁点を誤って付いたり、濁点が必要なのに付けなかったりする生徒が、実際にその語をどのように発音しているのかを確認する機会を作りたいと考えている。もし、推測したように発音と表記が一致していないことがある場合は、表記への意識をしっかりとさせる指導が必要である。しかし、曖昧な感覚で濁点を付けている場合は、連濁のルールを説明し、繰り返し注意喚起をして正しい読み方とその表記を定着させていく指導が必要になる。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

- 林雄大・澤隆史(2017) 聴覚障害児の読み能力と日本語意識に関する文献的研究—日本語学習者の学習動機に関する研究を手がかりとして—。東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ, 68, 211-220.
- 茂木成友(2023) 聴覚障害生徒における漢字の読みの認知モデル構築：音声言語・手話の違いに着目して。科学研究費助成事業研究成果報告書 課題番号 19K14289.
- 茂木成友・澤隆史・四日市章(2012) 重度聴覚障害児童における表記上の誤りの発達的变化。特殊教育学研究, 50, 161-169.
- 茂木成友・鄭仁豪・四日市章(2015) 聴覚障害生徒における漢字熟語の読みの特徴—漢字熟語の構成要因と読みとの関連—。特殊教育学研究, 53, 221-231.
- 田中優子(2023) 聴覚障害生徒による漢字の読み誤り。筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 45, 9-15.